

英語で授業を進めるうえで

甲斐 順

1. はじめに

本誌に拙稿「先生が英語をまず話してみましよう」を掲載していただいてから、早いもので21年が経過しました。オーラル・コミュニケーション科目が高等学校で平成6年度から導入されるのを前に、英語の先生がまず授業の中で英語を話す必要性を当時の拙稿で唱えさせていただきました。第1時間目の授業、授業に入る前、教室英語、新規教材・新出文法事項のオーラル・イントロダクション、本文理解のためのQ&Aを英語で実施してみることを奨励し、授業を英語で進めることが、生徒だけでなく、先生にも利点になることを述べさせていただきました。

そして、平成25年度からは、高等学校で「英語の授業は英語で行うことを基本とする」英語の授業が始まりました。この方針に対し、諸手を挙げて賛成の方、英語での授業に二の足を踏めない方、授業を英語で進めることに反対の方など、様々なタイプに分かれているのが現状であると感じております。

本稿は、授業を実際のコミュニケーションの場面に少しでも近づけるのに資することを目的として、私見を述べさせていただきます。

2. 英語で進める授業を阻止する四つの要因

本節では、英語で進める授業を阻止する要因について考えてみることにします。その要因は主に四つあると考えています。

一つは、多くの英語教師が、英語で進める授業を中学生、高校生、あるいは大学生の時に経験してこなかったことが挙げられると思います。筆者は、中学生、高校生の時、文法訳読式の授業を受け、大学生の時に、英語で進める授業をいくつか体験した程度でした。教科教育法の授業でオーラルメソッドを習うまでは、英語で進める授業など全く考えたことがありませんでした。筆者より若い方は、ALTと日

本人英語教師による協同授業を受けたり、英語で進める授業を経験したりした方もおられることでしょう。それでも日本人英語教師による英語で進める授業を経験している方はそれほど多くないかもしれません。

英語で進める授業を阻んでいる二つ目の要因は、授業を受ける生徒のほとんどが日本人であり、母語である日本語を介して、英語の基礎的・基本的な知識及び技能を習得させることが可能であり、かつ日本語で生徒の思考力・判断力・表現力等を育むこともできることが挙げられます。しかし、母語である日本語を介しても、必ずしも英語の基礎的・基本的な知識や技能が確実に習得されるとは限らず、時として予想外の思考力・判断力・判断力等を育むこともありえます。こういったことから、教師が外国語である英語を使ってわざわざ授業を進める必要はないと言えるのかもしれませんが。

第三の要因は、勤務校では英語で授業を進めても「無理」という教師の強い信念が存在するということを指摘できるでしょう。「日本語で授業を進めても授業が成立しないので」や「高校生になっても3単現のsすら満足に理解できていない生徒相手のクラスだから」、あるいは「進学校で進度が遅れてしまうため」などの理由で、英語で行うことを断念している、あるいは取り組まないという教師がいるのではないのでしょうか。

最後の四つ目の要因は、教師の英語力、英語運用力の問題が挙げられます。日本人英語教師が英語で授業を進める際には、「話す力」及び「聞いて理解する力」が真っ先に求められます。教師は、生徒にとって理解しやすい英語を話し、生徒の英語による発話を聞いて理解し、適切に応答することが求められます。教師には高い英語運用力が必要で、このことが高いハードルとなり、英語での授業に二の足を踏んでしまうのかもしれませんが。

筆者がかつて海外帰国生を相手に英語で授業を進めていた際に、ある生徒が聞き取りにくい英語をもごもごと言ってきたことがあります。イギリスの一地域の現地校に通い英語を学んできたその生徒に、もう一度発言するように促しても、どうしても聞き取ることができませんでした。その生徒は、自分の英語が通じないとわかったようで、日本語で質問を返してくれました。英語で進める授業の怖さを体感した瞬間でした。帰国生だけでなく、日本の中学校から英語を学んできた生徒の中には、40人学級の一番後ろの座席に座って小さい声で英語を話すような生徒もいます。発言を繰り返させてみても、どうしても聞き取れず、生徒のほうに近づいて日本語で言わせて理解できたという体験をしたことがありました。こういったことがあるとどうしても英語での授業に踏み切れなくなります。

それではこれら四つの要因を克服する手立てはないのでしょうか。次節で考えてみることにします。

3. 四つの要因を克服するには

前節では、英語での授業を阻止する四つの要因を指摘させていただきました。第一の要因は、英語で授業を進める授業を教師が受けたことがないということでした。これを克服するには、実際に英語で授業を進めている方の授業を見るしかないと思います。授業参観やDVDの視聴、講習会や研修会に参加してみるという方法が考えられます。

第二の要因は、授業が日本人の母語である日本語を介して行える環境にあるということでした。日本語のほうが、生徒にとって理解されやすいということが言えるかもしれませんし、そうしたほうがよい場合もあるでしょう。でも英語を少し介在させることによって、生徒に新たな気付きを起させる機会にもなりますし、生徒のリスニング力や教師のスピーキング力の向上にもつながります。

第三の要因は、「英語で授業を進めても無理」という教師の固定観念でした。教育困難校だから、あるいは進学校だからとあきらめずに、少しでも取り組んでみることです。英語で授業を進めることで、かえって生徒の取り組む姿勢が変わってくる場合があります。炭屋(2012)では、英語が苦手な生徒を相手に英語で授業を実践している様子が描かれています。

最後の四つ目の要因は、英語教師の英語運用力の問題、あるいは英語力に対する自信の欠如と言い換えることができるでしょう。英語で授業を進めるうえで、教師の側にリスニング力とスピーキング力に少しでも不安があればなかなか取り組めないのは当然です。

土屋(2011)は、リスニングの困難点について、「(1)音声の識別ができない。(2)語彙と文法力が不足している。(3)スピードについていけない。(4)話題についての背景知識が不足している。(5)音声言語は話す人の出身地、年齢、教育程度、職業などによりさまざまな変種があり、その多様性に対応できない。」の5つを挙げています(p.85)。また、土屋(同書)は、スピーキングを難しいと感じる理由について、「言語知識」((1)音声の知識、(2)適切な語彙を選択する知識、(3)発した言葉が相手に理解できるようにする文法知識)と「言語知識を使って話し、相手が話した情報を同時に処理する」能力((1)言語知識を活用し相手が意図しているように相手に話すこと、(2)相手の言っていることを理解できること、(3)相手が言ったことに即座に反応できること)を挙げています(p.93)。前節で触れた海外帰国生や声の小さい生徒の発話が聞き取れなかった体験に照らし合わせてみますと、土屋が指摘しているリスニングとスピーキングの困難点のほとんどが当てはまります。

この第四の要因を取り除くのは、容易なことではありませんが、まず教師が努力を積み重ねる必要があるでしょう。教師も生徒と同じように英語学習者であるという姿勢で、リスニング力を鍛えることが肝要です。生徒により明瞭な発音を心がけるよう促すのも手かもしれません。時に、聞き取れなかったとしても生徒がこう発言したのではないかと思って、敢えて教師が発話してみるのもよいかと思います。教師が誤った発話をするにより、やり取りを聴いていた生徒たちの中に笑いが起こることもあるでしょう。教師にとっては焦りと恥ずかしい気持ちが交錯するかもしれませんが、教室の雰囲気を和ませてくれるものです。

筆者自身いまだに不安を抱えながら授業を進めています。それでもできるだけ英語を使って授業を進めるよう心がけています。

4. 生徒に英語を使わせることで

文部科学省(2010)は、次のように述べています。

「授業は英語で行うことを基本とする」こととは、教師が授業を英語で行うとともに、生徒も授業の中でできるだけ多く英語を使用することにより、英語による言語活動を行うことを授業の中心とすることである。これは、生徒が、授業の中で、英語に触れたり英語でコミュニケーションを行ったりする機会を充実するとともに、生徒が、英語を英語のまま理解したり表現したりすることに慣れるような指導の充実を図ることを目的としている。(p.50)

「英語で進める授業」は、教師が英語を使うだけでなく、生徒にできるだけ英語を使わせることが主眼となるのですから、教師よりもむしろ生徒にどんどん英語を使わせるほうが望ましいと思われまます。

もちろん生徒が英語を使うようになるには、教師がまず見本を示すしかありません。教師が恥も外聞もなく自らをさらけ出し英語を使うことが第一歩です。人間の行うことですから、間違いも往々にしてあります。英語母語話者ですら、時に誤った英語を使っているのを耳にしますし、日本語を母語とする日本人でも日本語を使用する際に誤りを犯しています。教師が英語で話すのを見て、一人でも多くの生徒が英語を使ってみたいという気持ちを起こし、行動してくれればしめたものです。

筆者は今年度ペアワークを積極的に採り入れ、席の隣同士のペア内での対話から、同じペアによる全体発表、あるいは席が離れた生徒を指名しペアとして全体で発表させるなど、教室の場がコミュニケーションの場になるように試みています。ペアによる発表の際に、教師がさらに発話を促すような言葉かけ(例: He said he went to Yokohama. Ask him why he went to Yokohama.)を行い、ペア発表を単なる対話練習に終わらせず、より実践的なコミュニケーションの場となるような介入も行っています。教室全体が和むようなやり取りが発生し、笑いが起こることもしばしばです。

5. おわりに

拙稿「先生が英語をまず話してみましよう」を発表させていただいてからも、筆者は当時の考え方を基本的に大きく変えていませんが、授業では英語モ

ードと日本語モードをうまく交えながら授業を進めるのがいいのではないかと近年考えるようになっていきます。ハイブリッド型とでも言えばよいかもしれませんが、日本語と英語の割合は、クラスや科目、対象学年などによって変わってきます。すべて英語で押し通すよりも、日本語をはさむことで、生徒が常に緊張した状態の中に、一瞬息の抜ける場面、安らぎをもてる機会が生じるからです。

文部科学省(2010)は、「英語で授業を行うことを基本とする」ことについて次のようにも述べています。

このように、本規定は、生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業を英語で行うことの重要性を強調するものである。しかし、授業のすべてを必ず英語で行わなければならないということを意味するものではない。英語による言語活動を行うことが授業の中心となっていれば、必要に応じて、日本語を交えて授業を行うことも考えられるものである。(p.51)

学習指導要領が日本語の使用を全面的に禁じていないのですから、日本語を効果的に交え、いかに効果的、効率的に英語を教え、生徒の英語力を培うかが重要だと思えます。

筆者の恩師で、今は亡き伊藤健三文教大名誉教授から「教えつつ学び、学びつつ教える」と書かれた書状をいただいたことがあります。生徒と共に学ぶという姿勢で、教師と生徒が少しでも授業で英語を使い、生徒も教師も英語力をつけていければと願って、拙稿を閉じさせていただきます。

参考文献

- 甲斐順(1992). 「先生が英語をまず話してみましよう」. 『CHART NETWORK』 No. 8. 20-21. 数研出版.
- 炭屋正人(2012). 「英語が苦手な生徒に授業をするために: 単語を中心として」 『英語教育』 4月号. 28-30. 大修館書店.
- 土屋澄男(編著)(2011). 『新編英語科教育法入門』. 研究社.
- 文部科学省(2010). 『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』. 開隆堂.